ジョージ・エリオットの小説

——主題と手法——

塩川千尋

五 「サイラス・マーナー」(*Silas Marner, the Weaver of Raveloe*)

一八六〇年三月末、「フロス河畔の水車場」を書き終えたジョージ・エリオットは、その出版(同年四月四日)を待たず、ルイスと共にイタリアに旅立った。二人はフローレンスに滞在している間、サボナローラに関する資料を読むが、ジョージ・エリオットは彼の人生と時代が歴史小説のすばらしい材料になるのではないか、というルイスの提案にとびついた。[1] これが「ロモラ」という作品を生むきっかけとなったわけであるが、実際に彼女が「ロモラ」の執筆に取りかかるのは、翌年一八六一年の十月である。十五世紀末の、それも見知らぬ異国の地を舞台にした作品であるため、時代考証にかなりの時間を取られたこと、想像が自由に動き回れなかったこと、そして「サイラス・マーナー」を手がけたことが、「ロモラ」の構想を思いついてから実際に書き始めるまでに一年半近くもの時間がかかってしまった理由である。

ジョージ・エリオットが「サイラス・マーナー」に初めてはっきり言及するのは、一八六〇年十一月二十三日の日記の中である。彼女はその日記に、自分は今「サイラス・

マーナー」に取りかかっており、六十二頁ほど書き上げたこと、その作品はヨーロッパから帰国したあと思いついたもので、彼女が構想を練っていたもうひとつの作品を押しのけてしまったことを記している。さらに出版社のジョン・ブラックウッドに宛てた手紙の中では、「サイラス・マーナー」が「突然のインスピレーション」によって生まれた作品であり、「当世はやりの小説」とは非常に異なり、「古めかしい村の生活の物語で、きびの種のような、ほんの小さな考えから発展した」と述べている。[2] そして同じくジョン・ブラックウッドに書き送った別の手紙は、さらに詳しく「サイラス・マーナー」について語ってくれる。

〈前略〉あなたが、これまで読んだ限りでは、この物語がいくぶん暗いと思うのは当然です。実際、もしルイスが強く心を引かれなかったら、この物語には（ウイリアム・ワーズワースはもう亡くなったので）自分以外には誰も興味を持たないと信じ込んだことでしょう。でも、全体としては少しも悲しい物語だとはお思いにならないことを望みます。なぜなら、その中で私は純粋で自然な人間関係の治癒的影響を強調している――あるいは強調することを意図しているからです。ネメシスは大変穏やかです。私はずっと、物語は散文でなく韻文で書くほうがより効果的であろうと感じておりました――特にサイラスの心理に関するところでは。ただ、そうしたらユーモアを散文と同じように発揮することはできなくなるでしょう。物語は、私が幼い頃、袋を背負った、リネンを織るはた織りを一度見たのを思い出したことから、まずは一種の伝説的な話として、まったく突然私の頭に浮かんできました。しかし、その事を考えているうちに、もっとリアリスティックな扱い方をする気になったのです。[3]〈後略〉

この手紙は、「サイラス・マーナー」についていくつかの重要な事柄を示唆してくれる。ひとつは、ジョージ・エリオットがすでに準備に取りかかった「ロモラ」をほうり出し、執筆当初からこの作品に興味を持つのは自分だけであろうと思いながらも、突然思いついた「サイラス・マーナー」を書いた動機である。作者自身の言葉を借りないまでも、作品自体がはっきり示していることであるが、「サイラス・マーマー」には、「フロス河畔の水車場」の中では倫理を説くという小説家の使命を果たせなかったことへの反省が感じられる。「水車場」に登場する人物のほとんど

すべてはまったく成長しなかった。それどころか、逆にその性格的欠陥を強めていった。これはもっぱら、マギーという、自分にあまりにも近すぎる人物を主人公にしたため、題材とのディタッチメントをとれなくなり、個人的感情に負け、作品にのめり込んでしまったという失敗がもたらしたことである。「水車場」で主人公選定に失敗したジョージ・エリオットが、「純粋で自然な人間関係」が、人生に明るい光を与えてくれる物語の主人公に、突然思い出した「袋を背負った、リネンを織るはた織り」を選んだのも、うなずけることである。こうして恰好の主人公を見つけた彼女は、「サイラス・マーナー」で人生の肯定的な面を描くことができた。サイラスと、そしてこの作品のもうひとりの主人公ゴッドフリー・キャスには、はっきりとした道徳的進歩が見られるのである。サイラスは、神への信仰から、神と人間に対する徹底した不信を経て、人間の愛に支えられた信仰にたどり着く。一方、自分の幼い子供を見捨てるゴッドフリーは、十六年後、子供をサイラスから引き取りたいという悲願を、子供自身に打ち砕かれることによって、精神的な成長を見せる。要するに、「サイラス・マーナー」においては、二つのプロットのいずれもが、道徳的進歩を扱っているのであり、この点に関するジョージ・エリオットの反省がいかに大きかったかを物語っている。

さらに、この二つのプロットは、まったく異質の調子で描かれていく。右に引用した手紙の文面にあるとおり、彼女は「その事を考えているうちに、もっとリアリスティックな扱い方をする気になった」と言っているが、その考えた内容は、明らかにゴッドフリーを中心とする物語である。彼女はサイラスとエピーの世界を、韻律を意識しながら、詩情豊かに美しく描いていくが、もう一方のプロットは、ジョージ・エリオット本来のリアリズムによって描かれる。それでいて両者は見事な調和を持ち、少しも異和感を与えることはない。作品全体の流れは実にスムーズであり、この点においても、構成上の統一を欠いた「水車場」とは大いに異なる。

ちなみに、ジョージ・エリオットが複数のプロットを使うのは、この作品が初めてである。明らかに彼女は新たな可能性を求めて「サイラス・マーナー」の中でダブル・プロットを試みたわけであるが、彼女は、最初の、しかも語り口まで変えた実験でいきなりすばらしい成功を収めた。

ジョージ・エリオットは、これ以後、常に複数のプロットを使うようになる。しかし「ミドルマーチ」を除けば、プロットとプロットの間には明確な亀裂があり、しかもこの亀裂は作品を追うごとに深くなっていく。そして出来のいい部分と悪い部分との差はますます大きくなるのであるが、このことについては機会を改めて再び触れることにしたい。

「サイラス・マーナー」のもうひとつの大きな特徴は、ユーモアである。ジョージ・エリオットは、ユーモアを描くために韻律を使うのを止めたと言っていた。それはこの作品にとって幸運かつ適切な判断であった——彼女の詩作のまずさは四年後にはっきり証明されることになる。この判断のおかげで「サイラス・マーナー」は今日、古典の傑作に数えられているし、またその動機となったユーモアも十分に描かれている。そしてこの作品では彼女がもっとも得意とする種類のユーモアがある。つまりラヴェローの村の男達にとって唯一の社交場である居酒屋、レインボー亭の場面にあふれるユーモアがそれである。作者は第六章全体をこの居酒屋に集まった男達のやり取りに費しているが、「はがされたヴェール」「フロス河畔の水車場」と暗く厭世的な、したがってユーモアがまったくなかった作品の続いたあとでは、読者はここに来て大きな安堵を覚える。そしてこの場面は、ジョージ・エリオットがユーモアを発揮できるのは、どういう場合であるかを示している。まず第一は主題部からはずれた場面であることだ。彼女は主題部ではほとんどユーモアを扱うことができない。したがって、ユーモアは常に端役の役割である。そして第二はその端役が田舎の人間であること、したがって舞台は田舎の村であることが必要となってくる。こういう条件が揃っていると、ジョージ・エリオットはすばらしいユーモアを発揮できるが、逆にそうでない場合には、ユーモアは影を潜めてしまう。彼女は「サイラス・マーナー」を境に、二度と田舎の村を舞台に据えることはなくなるが、これはそのまま、あとの作品から彼女独特のユーモアが姿を消すことを意味する。「水車場」にユーモアがなかったのは、ほかにも重大な要因はあったが、セメント・オッグスという町を舞台にしたことも一因となっていたのだ。

「サイラス・マーナー」が、「フロス河畔の水車場」の与えた反省材料をもとにして生まれた作品であることを述べ

てきたが、実際にはそれがただちに生かされ、「サイラス・マーナー」という傑作となって実を結んだわけではなかった。ジョージ・エリオットは、その中間で「兄ジェイコブ」（“Brother Jacob”）という短編を書いており、これが「水車場」とはまったく逆の反省材料を与えていたのである。作品との距離を取れなかった「水車場」に対し、「兄ジェイコブ」ではその反動から、作者自身を少しも投影しない、作者がまったく共感を覚えることのない人物が選ばれている。結果は、ディタッチメントが大きすぎる――と言うより、作者が主人公の欠陥、愚かさを冷笑しているような作品となってしまった。つまりジョージ・エリオットは、極端から極端へと大きく揺れ動いたあと、「サイラス・マーナー」でその中間的な位置を見い出したのであり、この作品が見事なディタッチメントを持っているのは、それなりの過程を経たからであった。日記や手紙を読む限り、彼女は一瞬のひらめきだけで「サイラス・マーナー」を書いたように思える。たしかにサイラス・マーナーという主人公は「突然のインスピレーション」によって思いついたかもしれないが、作品そのものは、「水車場」のほかに、「兄ジェイコブ」というまったく文学的価値のない、言わば捨て石的存在の作品があって初めて可能だったように思える。

「兄ジェイコブ」は、ほとんど批評の対象にされたことのない作品である。今述べたように、文学作品として見るべきところがないからである。皮肉が強すぎるし、また皮肉を取ったら何もあとには残らない作品である。物語の展開に面白味があるわけでもない。そもそも主人公デビッド・フォウは、あまりにも魅力に乏しい。彼は、いかにも粉を練る菓子屋にふさわしく「（練り粉のように）青白い」（“pasty”）血色をしている。口は「唇のない」と形容され、情熱の欠如、打算、狡猾を思わせる。髪は堅くて短く、おまけに足はがにまたである。そして彼の内面はそれにもまして醜い。感受性も知性もなく、浅薄で自惚が強い。利己的にして虚栄心が強く、自己顕示欲に固められている。そして人を愛する心を持たない。彼が愛するのは、人の羨望を受けることだけである。菓子作りのほかにはなんの取り柄もないくせに、野心だけは強い。野心を満たすために悪事を考えるが、実行するだけの度胸も持たない臆病者でもある。こういう人物を主人公に選んでも、作者の語り口が

コミカルならまだ救いはあるだろうが、ジョージ・エリオットは、デビッド・フォウを、冷たい嘲笑的な皮肉の対象にする。したがって、主人公には始めから共感を少しも覚えない読者の気持は、物語が進むにつれ、デビッドに対してますます冷やかになっていく。

彼の浅はかさは、物語の出だしに書かれている職業選択の動機にまず表われる。彼が菓子屋になるのは、甘党であるがゆえに、菓子屋の店を見たとたん、「お菓子屋こそ、もっとも幸福にしてもっともえらい人間」だと思い込んだからである。彼は菓子屋の徒弟になるが、思い上がりが強く、自己認識をまったく持たない。自分は「人目を引く若者」「きわめて目立つ人間」になって当然と思うデビッドは、やがて菓子作りという平凡で「狭い運命」には耐えられないと思うようになる。この身の程をわきまえぬデビッドのいやらしさは、彼が抱く夢にも表われる。「肌の色が白いという、すぐにも人に認められる大きな長所」があるというだけで、彼は黒人のいる西インド諸島へ行くことを夢見る。彼はその夢を実現させるための資金を得るべく、主人の金を盗もうと思うが、小心ゆえにそれもできないまま徒弟を終える。結局デビッドがやったことは、母が爪に火をとぼすようにしてためた大切な金を盗むという、もっとも安易で安全で、なおかつもっとも卑劣な道を取ることである。

「兄ジェイコブ」は、このデビッドが天罰を受けるまでの過程を展開していく——と言うより、ただそれだけしか描かれていないのであって、作品のタイトルに、主人公ではなく、兄の名前を使ったことが示すとおり、最後に出てくる次の一節を言いたいがために書かれたようなものだ。

ここでお菓子屋デビッド・フォウ氏とその兄ジェイコブの物語は終わる。そして私達はその中に、偉大なるネメシスが、思いもよらぬ形で自らの姿を隠す顕著な例を見ることと思う。

たしかにネメシスは、白痴の兄ジェイコブという「思いもよらぬ形」に変身し、デビッドに罰を与える。六年後、夢破れてジャマイカから帰ってきたデビッドは、故郷に戻らず、グリムワースの町に現われる。この時の彼はある種の自己認識を持ってはいる。しかし、グリムワースという目立たない、小さな町を選んだことが示すように、それは自己顕示欲が形を変えただけにすぎない。過去を勝手に断ち切れると考えて名前をエドワード・フリーリーに変え、

氏・素姓を偽って町に住みつくデビッドは、町で初めての菓子屋を開店し、一応の成功を見る。が、金持の娘との結婚という好運をつかみかけたところで、弟を慕う兄ジェイコブが町に現われ、デビッドのうそ、偽りは暴露されてしまう。しかも、兄に居所を知られてしまうきっかけは、父親のわずかな遺産を欲しがったことであり、デビッドは自分で自分を破滅に導くのである。

主人公が、母の金を盗んだことと、身の程をわきまえない思い上がりに対して罰を受けるこの短編は、度を越した皮肉と人物設定のまずさのために、深みもなければ魅力も持たない。肝心の結末にしてもなんら読者に訴えるところはない。デビッド以外の人物――二人の兄ジェイコブとジョナサン、デビッドを溺愛したという母、さらにグリムワースの住人――にしても、誰一人としてわれわれの共感を得られるものはいない。「兄ジェイコブ」が読者の記憶に残るとすれば、「水車場」の反動と余韻を感じさせる作品であり、「サイラス・マーナー」につながっていく作品だという理由からだけである。と言うのは、この短編は、「サイラス・マーナー」にネガティブな影響を及ぼしただけでなく、いくつかのアイディアを提供した。母の大切な金を盗むデビッドは、サイラスにとって唯一の生きる楽しみ、目的である金貨を盗むダンスタンに変わる。そして両者共、その罰を受ける。デビットと同様、サイラスも見知らぬ土地に住みついた当初、よそ者であることと、その職業を理由に住人の偏見を受ける。さらにサイラスはデビッドと同じく、外見的には醜い。作者はサイラスを見て村人が偏見を抱くのも無理からぬことであると言う。

赤い光に照らされた彼の青い顔、奇妙に見開かれた目、貧弱な体格を見れば、誰でも彼がラヴェローの村人たちから軽蔑的な憐みと、恐怖、そして疑惑の入り混じった目で見られている理由をおそらく理解できたであろう。(五章)

「兄ジェイコブ」の約一ヶ月後に書き始められた「サイラス・マーナー」が、まっ先に読者に与える印象は、語り口のすばらしさである。おとぎ話のような雰囲気は、作品の出だしでいきなり確立される。主人公アダム・ビードが、弟セスや他の大工仲間と一緒に仕事をしている情景の描写、あるいは、物語の展開や主人公の運命を暗示するフロス川、リプル川、セント・オッグス、さらにドールコウ

ト・ミルの自然描写とはまったく異なり、この作品の出だしは場所も時代も明らかにしない。作者は、突然思い出した「袋を背負った、リネンを織るはた織り」の姿を頭に思い浮かべながら、「昔むかし、あるところに」に似た口調でこう語り始める。

むかし、農家では糸車がブンブンと忙しくまわっていたころ――麻糸レースつきの絹をまとった身分の高い婦人でさえ、ピカピカの樫で作った糸車をなぐさみに持っていたころ――ずっと遠くのいなか道や、山ふところ深く分け入った地方などに、たくましい村人に比べると、絶滅した種族の生き残りかと思えるような、顔色の悪い、背の低い男たちを見かけることがあった。

サイラス・マーナーを中心とするプロット（以後、サイラス・プロット呼ぶ）の調子はこの出だしで決定され、最後まで変わることがない。作者は引き続き、田舎の村の一般的風土、その中で生活を送るはた織りにまつわる一般的迷信について語ったあと、サイラス・マーナーと、彼が住むラヴェローという村の具体的描写へ進んでいく。その内容自体は美しいわけでもないし、詩的でもない。それどころか、人間の暗く醜い部分がもっぱら描かれている。無知と迷信に支配された村人は、「力と恵み」を結びつけることができない。したがって、あらゆる種類の「力」は疑惑の対象となってしまう。はた織りが村人の偏見を受け、孤独な生活を強いられて「偏屈な性癖」を身につけていくのも、彼らが町から田舎に移ってきた「よそ者」だからというだけではなく、手先が器用だったからでもある。サイラスがラヴェローにやってきた動機は、陰惨そのものである。ランタン・ヤードにおける十五年前の彼の生活は、「行動的で精神的にも活気にあふれ、厚い友情に囲まれていた」（傍点・筆者）が、親友と思い込んでいた友人が仕組んだ罠にはまり、濡れ衣を着せられる。しかも彼の生活に大きな光明を与えていたメソディストのグループ、「ランタン・ヤードの教会の集い」は、実際にはランタンのような、うす暗い光しか放っていなかった――サイラスが有罪か否かを神に問うべく、彼らはくじを引いた。神の判定が有罪と出るや、サイラスは人間に対する信頼と神への信仰を完全に失う。

ジョージ・エリオットは、こうした暗い出来事を、素朴な文体を使い、淡々とした調子で語っていく。そして物語

はひとつのリズムに乗って、よどみなく流れていく。この流れを邪魔する目障りな作者の解説や皮肉はまったく見あたらない。サイラスを陥れるウィリアム・デインはデビット・フォウに生き写しだ。「目尻の上がった細い目と固く結んだ口元」に「得意な気持を抑えた自己満足の表情」を浮かべるウィリアムは、皮肉の恰好の的である。しかし作者は彼に関する自分の感情をまったく示そうとしない。彼が真犯人であることすら、サイラスの確信として描くだけである。彼がランタン・ヤードから姿を消すと、ウィリアムは二度と作品に現われることはない。我々は、サイラスの婚約者まで奪った彼がその後どうなったかは知らされない。作者は「ランタン・ヤードの教会の集い」がくじを引いたことについても、論評しようとしない。サイラスは、なぜ、くじを引いて神の判定を問うことが正しいかどうかを疑ってみなかったか、という当然の疑問に対しては、「自分の持てる力すべてが、信仰を失った苦痛に変わった時」に、そのような、かつて経験したことのない考え方をするのは、とてもサイラスにできることではなかった、と答えるだけである。そしてその次に続く一文に接すると、読者はもはやそれ以上詮索しようとは思わなくなる。

もし、人間の罪のみならず、人間の悲しみをも記録する天使がいるとすれば、誰の責任でもない誤った考えから生じる悲しみが、どれほど多く、どれほど深刻であるかを知っていることだろう。(一章)

作者は、サイラスの運命を大きく変えることとなった「神の判定」についても、解説を加えようとしない。ジョージ・エリオットは、もっぱらミスティシズムの立場からこの問題をながめるだけであり、最後まで直接自分の意見を言おうとしない。無実の自分になぜ神は有罪の判定を下したか、という問題は、サイラスにとっては単にくじ運が悪かった、で片付けられるものではない。それから二十年あまり後、過去を振り返ることができるようになったサイラスは、ドリー・ウィンスロップとその事を話し合う。しかし、神学に通じているわけでもない、無知な二人がいくら話しても、論理的な結論に到達できるはずもない。サイラスは“christened”の意味も知らないし、ドリーは神様と言っては「いかにも慣れ慣れしく聞こえる」という理由で「神様たち」と複数形にしてみたり、イエス・キリストを表わすI・H・Sの意味を知らなかったり、チャペルという言葉を聞いて「悪人のたまり場」と思ったりする。ラ

ヴェローの宗教とランタン・ヤードのそれとがあまりにも違うので、二人はただ戸惑うばかりであるが、それでもドリーはひとつの解答にたどり着く。ドリーは、この世に不幸が多いこと、善人に突然大きな不幸が降りかかることだって多いことをよく承知している。が、それは神への不信へつながってはいかない。ドリーは、サイラスに有罪の判定が下りたことを、そうした不幸のひとつと捉える。

「〈前略〉つまり――あんたにとって何が正しいことだったのかを、このあたしは心の中で分かっているんだし、それにあの悪い奴〔ウィリアム・デイン〕は別にして、一緒にお祈りをしてくじを引いた人たちは、もしできることならあんたに正しいことをしてやりたいと願っていたんだということは、つまり、わたしたちをお造りになり、あたしたちより知識が豊かで、もっと立派なみ心をお持ちの神様たちがいらっしゃるということです。それだけは、はっきり信じられることですが、ほかのことは考えてもまったく分かりません。不意にやってきて大人の命を奪い、あとに誰も頼る人がいない子供を残していく熱病があったり、手や足をくじいてみたり、そうかと思うと、間違ったことをしないまじめな人が、そうでない人のために苦しめられたりすることがありますからねえ――この世には不幸が絶えませんし、あたしたちにはとうてい理解できないことがいろいろとあるんです。だからあたしたちにできることはね、マーナーさん、信じることです――知る限りの正しいことをして、あとはただ信じるんです。ほとんど何も知らないあたしたちにも、少しぐらいのいい事や正しい事が見えるんだとすれば、あたしたちが知っているより大きな善や正しい事があるって確信してもいいんじゃないかしら――そうに違いないってあたしは心の中で感じています。〈後略〉」（十六章）

このドリーの素朴な言葉の中に表わされている、偶然よりも大きな「力」の存在に対する確信は、やがてサイラスにも見られるようになる。彼は、エピーが雪の上を歩いて自分の小屋にやってきたことを、単なる偶然と考えることはできない。彼はその出来事と盗まれた金貨との間には因果関係があることを漠然と感じている。人間に対する愛情が目を覚まし始めた、しかし、依然として混迷の状態から抜け切らないサイラスの言葉にならない感動と、その漠とした気持を、作者は次のように描く。

マーナーは、今まで知らなかった何かが自分の人生に起こりつつあるのを感じて、自分にも理解できない感動で体を震わせながら、子供を膝の上に抱き上げた。頭も心もすっかり混乱していたので、もし考えていることや感じていることを言葉にしようとしたら、金貨の代りに子供を授かったんだ、金貨が子供に変わったんだ、としか言えなかったであろう。(十四章)

サイラスは、盗まれた金貨が十六年ぶりに戻ってきた時、昔を思い出しながら、自分の心の中で起きた変化をエピーに話して聞かせる。エピーに対する愛を通して「神の摂理」をはっきりと感じているサイラスは、もはや仮定法の力を借りるまでもなく、不思議な力の存在をはっきりと言えるようになっている。エピーの感謝の言葉に答えてサイラスは言う——

「いやいや、父さんのほうこそ天の恵みを授けてもらったんだ。父さんのところに来て助けてくれなかったら、みじめな思いをしながら死んでしまっていただろう。ちょうどいい時に金貨は盗まれたんだ。しかもこのとおり、ちゃんととっておかれたんだ。おまえのために必要になる時が来るまでとっておかれたんだ。不思議だ——人生というのは、ほんとうに不思議だ」(十九章)

ジョージ・エリオットは、この世の不可解さ——サイラスとドリーが、目に見えない大きな力として感じているもの——に解説を加えようとしない。エピーの結婚を目前にひかえたある日、サイラスは三十一年間にわたる胸のわだかまりを取り除こうと、ランタン・ヤードを訪れる。牧師のペイストンに会い、くじのことや自分に下された判定について話し合い、無実の罪が晴らされたかどうかを確めたいからである。しかし、エピーには「好むと好まざるとにかかわらず、ものごとは変わっていくんだ。なんでも今のまま少しも変わらずにいることはないんだよ」(十六章)と言ったサイラス自身が、今度は時の流れに驚かされる。彼の生まれ故郷は様相を一変させており、ランタン・ヤードにはもはや教会はなく、かわりに大きな工場が立っている。サイラスは答を得られないまま、ラヴェローに帰ってくる。読者もサイラスの疑問に対する作者の説明を聞くことはできない——謎は謎のままにされている。しかし、サイラスの信仰心は少しも揺らぐことはないし、彼の幸福にほんのかすかな暗い影がさすこともない。彼は自分の信仰心はエ

ピーに支えられていることを知っているし、エピーが自分を見捨てない限り、幸福でいられる確信があるからである。[4] エピーを授かって以来初めて出会った大きな危機――実の親ゴッドフリーが名乗り出て、エピーを引き取ろうとした出来事――を、エピーのシンデレラとは逆の選択によって乗り越えることができた今、三十一年前の謎は彼の人生になんの影響も及ぼさない。彼が、「分からないことがたくさんあるのも、天の神様たちのおぼしめしです」と言うドリーに答えるサイラスの言葉――それはこの作品で彼が言う最後の言葉でもある――は、読者の心に長い余韻を残す。

「〈前略〉あの子を授けてもらい、わが身のように愛するようになってからは、神様を信じなければならないと分かったんです。それにあの子は、けっしてわたしのそばを離れないと言ってくれていますから、死ぬまで神様を信じていかれると思います」(二十一章)

こうしてサイラスは、作者自身とよく似た軌跡を描きながら、人間の愛に支えられた信仰にたどり着く。彼は昔の信仰を取り戻したわけではない。もしそうなら、彼の「愛情に恵まれた老人の、穏やかで物静かな幸福の表情」(十六章)(傍点・筆者)を読者は見ることができなかっただろう。

ジョージ・エリオットが、これほど素朴に「愛は神である」という信念を説いているのは、後にも先にも、このサイラス・プロットだけである。サイラスとドリーの単純な言葉の中には、ドリーの言う「大仰な言葉」を使った抽象的論議の展開の可能な哲学的問題が含まれているが、作者はあくまでも二人のセリフとサイラスの心理を描くだけである。共感を説く主題部では、倫理的な意図が先行してしまうためにぎこちなさを見せることが多いジョージ・エリオットではあるが、サイラス・プロットはほとんどそういうところがない――あるとすれば、成長したエピーが多少理想化されていることであろう。[5] 勿論、サイラス・プロットの倫理性は明らかであるが、このプロットの焦点は、サイラスが幸福になっていく過程にぴったりと合わされていて、「純粋で自然な人間関係の治癒的影響を強調する」という作者の意図が、読者の印象を著しく害するほど前面に押し出されることはない。作者はそれを巧みに隠しながら、サイラスの心の中で繰り広げられるドラマを描いていく。それは、アーサー・ドニソーンなどに見られる緻密な

心理分析ではなく、心理描写であり、韻律を思わせる響きの良い音と、よどみのない流れとを持つ素朴な文体で語られる美しい描写である。そしてこの美しさは、幼いエピーがサイラスにもたらす心の変化を描くところで、もっとも顕著である。例えば作者は、金貨とエピーのそれぞれがサイラスに与える影響を比較対照しながら描いていくところがある。

〈前略〉かくして何週か経ち、何ヶ月かが過ぎ去るにつれ、子供はサイラスの生活と、彼が今までは孤独を求めるあまり、ますます頑なに遠ざけていった他の人の生活との間に、日ごと新たなつながりを作り出していった。何も必要とせず、堅く閉ざされた孤独の中で崇められなければならなかった金貨――太陽の光の届かない所に隠され、鳥の鳴き声を聞く耳もなく、人の声に反応することもない金貨――と違って、エピーは果てしない要求と、絶えず成長していく欲求を持つ子供であり、生きた音、生きた動きを求め、愛した。新しいよろこびを得られると信じて、なんでもやってみた。そして彼女を見るすべての人の心に優しさを呼び起こした。金貨は常に彼の考えを堂堂巡りさせ、彼にほかの事を何も考えさせようとはしなかった。しかしエピーはさまざまな変化と希望から成る目的であり、彼はどうしても先のことを考えざるをえなかった。彼の思いは、昔のように同じ空虚な壁に向かって夢中で進んでいくこととはまったく異なったところにあった――それは、父サイラスがどんなに自分をかわいがってくれたかを、エピー自身が理解するようになった時にやってくる、新たな生活であった。そして彼は、身近にいる家族を結びつけている絆やいたわりの心の中に、その時のエピーと自分の姿を探し求めた。金貨は彼に織機の単調な音以外には耳を塞ぎ、繰り返し織られる布のほかには目もくれずにすわり、ますます長い時間、織機を織り続けることを要求した。しかしエピーは彼を織機から引き離し、彼に仕事の手を休める楽しさを教えた。エピーのういういしい命は彼の感覚を呼び醒ました。彼は、冬を越して初春の日差しの中にはい出てきた蝿にも気をとめるようになり、子供がよろこんでいると、それだけで心が暖まり、うれしくなった。(十四章)(傍点・エリオット)

サイラスの心理描写は、単に美しいばかりではない。雰囲気はおとぎ話的であっても、心理描写におけるリアリズムは保たれており、作者の人物把握はしっかりしている。ジェローム・テイルは、友人に裏切られれば不信と絶望に陥り、子供を授かると人間と神に対する信頼を取り戻すサイラス・マーナーは、まったく自分の意志を持たず、「身に起こることの合計」でしかない、自分の運命を選択していく伝統的な主人公に比べると、「キャラクターを持たないキャラクター」と呼べるかもしれない、と言う。[6] たしかにサイラス・プロットの粗筋から判断すればそういうことになるだろう。しかし彼の言葉は極論であって、サイラス・プロットは、サイラスの正直で優しくて素直で、人を愛する性格に支えられているし、また、エピーは誰にも渡さず自分で育てるんだという彼の突然の決断は、彼自身の意志で、彼の人生におけるもっとも重大な選択をしたことを意味しているのである。そしてジョージ・エリオットは、こういうサイラスの心理をしっかりと、しかも柔らかく摑んでいる。とりわけ彼がエピーに愛情を抱く過程は、彼の性格にもとづいて描かれており、少しも唐突さ、不自然さを感じさせない——暖炉の前ですやすや寝ている子供を見たとたん、サイラスの心に、一挙に愛情が湧き上がってくるわけではないのだ。彼はランタン・ヤードで受けた、あまりにも深いトラウマのために、人間社会から遠ざかり、長年孤独の中で暮してきた。彼は「織機を織る昆虫」のように織機の中に閉じ込もり、金貨をながめて感触を味わうことだけに唯一の楽しみを見い出すような、潤いのない生活を送ってきた。しかし、彼の感受性や愛情は死んだのではなく、ただ眠っているだけであり、彼の本質はほとんど変わっていない。このことはまず、病気で苦しむサリー・オーツに彼が感じる憐みに表われる。彼は守銭奴とみなされているが、厳密にはそうではない——守銭奴は金貨の数を愛するが、サイラスは、一枚一枚の金貨に個性を認め、「顔なじみになった（自分の）金貨を、知らない顔を持つほかの金貨と絶対に取り換えたいとは思わなかった」（二章）のだ。彼が金貨を愛するのは、人を愛する心がその対象を奪われた結果であり、くすぶった情熱が、物に燃焼の対象を求めたことがもたらした結果である。一見、枯れた老木のようなサイラスの体にまだ「愛情の樹液」が流れていることは、彼が長年大切に使っていた「茶色の土瓶」をこわしてしまう時にも証明される。彼は割れた瓶の破片を拾い

上げ、「深い悲しみ」を抱いて小屋に持ち帰る。彼は破片をつなぎ合わせると、それがまるで愛する人の遺体であるかのようにいつもの場所にそっと置き、思い出にひたる。

暖炉の前で寝ているエピーの金髪を見た時、サイラスは一瞬、盗まれた金貨が戻ってきたのかと思う。しかし、それが幼い子供の髪であることが分かると、今度は幼くして死んだ妹が、夢の中で自分のところに戻ってきたのかと思う。この妹の思い出は、さらにサイラスの心に「昔のわが家と、ランタン・ヤードに通ずる昔の通りの光景」と、「そうした遠い昔の場面とは切り離せない当時の感情」（十二章）を蘇らせる。サイラスがこの子供に愛情を抱く前に、幼い妹に対する昔の愛情の蘇生を彼は経験するわけであり、だからこそ彼の心に、子供は誰にも渡さず、自分で育てるという気持が強く湧いてくるのである。

このように、作者はサイラスに共感を寄せながらも常に客観性を維持して描いていく。この共感とディタッチメントの調和は実に見事であり、ジョージ・エリオットの作品の中で際立った存在である。毎晩金貨を積み上げてはよろこんでいる、人間嫌いの偏屈な老人が、自分の小屋に迷い込んできた幼い子供を愛するようになって、大きく変貌し、道徳的進歩を遂げるという話は、センチメンタリズムに陥る危険に満ちているが、サイラス・プロットには、そのかけらも見られない。さらに、こういう話はフィクションの題材としてはいかにも陳腐であるが、ジョージ・エリオットは、ありふれた、新鮮味に欠ける題材が、扱い方によっては読者の心に強い印象を残す物語の題材になり得ることを、サイラス・プロットによって示していると言える。そしてその扱い方というのは、ここでは、神秘的な雰囲気をかもし出す、おとぎ話の語り口なのである。

この語り口は、プロットを発展させる上においても、大きな貢献をしている――と言うより、サイラス・プロットには、そういう雰囲気を必要とする要素が存在すると言った方が良い。なぜなら、厳密なリアリズムの世界では許されないことも、おとぎ話の雰囲気の中ではある程度許容されるからである。ジョアン・ベネットは、「サイラス・マーナー」においては、偶然の出来事が多用されていることを指摘している。[7] たしかにこの作品では、物語が新たな局面を迎えるためのメイン・スプリングとして、偶然が多く使われている。これは、人物の性格から必然的にプロットを発展させ、偶然の要素をできるだけ排除しながら行動と

性格の因果関係を徹底的に追求しようとするジョージ・エリオットにしては珍しいことである。サイラス・プロットについて言えば、そもそも物語の発端となるのは、サイラスが有罪か無罪かを決めるためにくじを引いたら、たまたま有罪と出たことである。偶然が彼に不幸をもたらすとすれば、彼を幸福に導くのも偶然である。子供を抱いたモリー・ファレンは、偶然サイラスの小屋のそばで事切れ、しかもその時、偶然小屋の戸は開いており、そこから漏れる明りが子供をサイラスの小屋へ導く。ベネットは、ゴッドフリーを中心とするもうひとつのプロット（以後ゴッドフリー・プロットと呼ぶ）をも含め、この作品に見られる偶然の出来事はすべて「あり得ないことではない」とし、ジョージ・エリオットはトマス・ハーディほど偶然に依存してはいない、「こうした出来事をひとたび読者が受け入れれば、物語の運びは説得力を持つ」というなんとも苦しい弁護というか、解釈を示している。しかし、サイラス・プロットとゴッドフリー・プロットの語り口がまったく異なるように、偶然の扱われ方もそれぞれのプロットでは異なるのであり、ベネットがその区別をしないのは合点がいかない。彼女の論を受け入れるとして、くじによる判定結果、モリーの死に場所がサイラスの小屋の近くであったということは、「不可能ではない」として説明できる。しかし、問題は、サイラスの持病であるなんとも奇妙な発作の扱われ方である。彼は、この発作を起こすと失神状態に陥り、やりかけていた動作はその時点でぴたりと止まる。彼はそのまま一時間以上も静止しており、やがて発作が終わると、途中で中断されたままになっていた動作は、何事もなかったように――あたかも時間が止まっていたかのように――再び続けられるのである。ジョージ・エリオットは、このサイラスの発作を「強硬症」（"catalepsy"）と呼ぶが、[8] 強硬症はヒステリーや精神分裂にみられる症状であり、サイラスには強硬症を起こすような病気はない。しかし、それよりはるかにまずいのは、ジョージ・エリオットが、サイラスにおいてはすでに不自然なこの発作を、サイラス・プロットを発展させるもっとも強力な原動力として使っていることである――サイラスは実にタイミングよくこの発作を起こす。

「ランタン・ヤードの教会の集い」の一員であったサイラスは、ある祈とうの集会でこの発作におそわれる。仲間の信者は、これを「霊的なおとずれ」「神の恩寵の印」と

解し、彼は「特別な修業を積むべく選ばれた信者」、つまりエリートとみなされ、特別な関心を集めるようになる。このことが、自己顕示欲の強い親友ウイリアム・デインの嫉妬を買う動機となる。この嫉妬にさらにサイラスの婚約者セアラへの横恋慕が加わって、ウイリアムはサイラスを陥れる機をうかがう。そして彼にそのチャンスを与えるのは、再びサイラスをおそう、同じ発作なのである。要するに、この奇妙な発作が、神と人間に対するサイラスの不信を導く第一の要因になっているわけだ。しかも十五年後、再び彼の運命を大きく変える要因も、この発作である。

エピーの母親が死んだ時、サイラスの小屋の戸が開いていたのは、彼が戸を閉めようとしたその瞬間、また発作が彼をおそい、サイラスは戸に手をかけたまま、じっと立ちすくんでいたからである。エピーが、そこから漏れる光に導かれて小屋にたどり着くのは前述のとおりである。サイラスは、大晦日の晩に除夜の鐘を聞くと盗まれた金貨が戻ってくるかもしれない、と村人にからかわれ、その晩は遅くまで起きて小屋を出たり入ったりしていた。またゴッドフリーの秘密の妻、モリー・ファレンは、夫への復讐心から、ラヴェローでもっとも盛大な宴が催され、主だった村人がすべて夫の屋敷に集まる大晦日の晩を狙ってやってきた。麻薬におかされたモリーは、バザリーの町から雪の中を、それも二歳の子供を抱いて、ラヴェローの村の端にたどり着く。疲労困ぱいした彼女が、そこでこの世で自分に安らぎを与えてくれるただひとつのもの、アヘンを飲みすぎて事切れても不思議はない。したがってサイラスとエピーの運命が、この時点で結びつくことは至極当然である。しかし、彼のおかしな発作に、二人の運命を結びつける大役を課すというのは、とてもリアリズムで扱いきれるものではない。ジョージ・エリオットは、この時のサイラスの発作をどう描いているだろうか。

彼は再び小屋の中に入ると、かん抜きに手をかけ、戸を閉めようとした――が、実際には閉めていなかった。というのは、金貨を盗まれてからすでに起こったことであったが、強硬症という目に見えない杖がひと振りされて、彼はその時、一時的に意識を失い、まるで彫刻のようにじっと立っていた。(十二章)

「強硬症という目に見えない杖がひと振りされて」――これは比喩と言うより、おとぎ話である。作者は、明らかにサイラスの発作に対する読者の抵抗を予想して、こういう

表現を使っているのだ。

この発作は、すでに一章で村人の論議を呼んでいる。モグラ捕りのジェム・ロドニーは、サイラスが「重い袋を背負ったまま、牧場の柵の踏み段に寄りかかっている」のを目撃する。彼の目は「死人のように据って」おり、「手足はこちこちで、手はまるで鉄でできているかのように」強く袋を握っていたが、すぐに正気を取り戻し、ジェムに挨拶するとさっさと歩き出していった。村人の中には、それを「発作」であると、合理的に解釈する者もいる。しかし、ラヴェローの賢者を自認するメーシーは、違った解釈を示す。メーシーは、発作というものの正体をよく承知しており、「発作というのは卒中のことではないか、そもそも卒中は、人の手足の自由を奪い、もしその人に頼るべき子供がいない場合には、教区の厄介にならないと生きていかれないようにするものだ」と考える。ここまでは合理的であるが、一般論からサイラスの発作に移ると、メーシーの考え方はとたんに非科学的になり、ラヴェローの精神風土を暴露する。

人間が、かじ棒につけられた馬車馬よろしく、しっかり立っていて、「それっ！」と言えばすぐに歩き出せるなんて、卒中じゃない。だが、人間の魂が体から離れて、鳥が巣を出てまた戻ってくるように、出たり入ったりすることはあるかもしれない、そうやって人間は賢くなりすぎるもんだ。と言うのも、こうして体から抜け出た状態でそういう連中は、近所の人が自分の五感や牧師さんから知る以上のことを教えてくれるところへ行くからだ。いったいマーナーさんは、薬草の知識と――それに、人に見せる気があれば持っていることがみんなに分かるまじないを、どこで身につけたんだろう。サリー・オーツは、医者にかかっていた時は、二ヶ月以上も体が張り裂けんばかりの激しい動悸が続いたのに、マーナーは、病気を治してサリーを赤ん坊のように眠らせた。それを見たものなら誰だって、ジェム・ドロニーの話に、さもありなん、とうなずくことだろう。マーナーは、その気になればもっと大勢の病気を治せるかもしれない。だが、こんな男に対しては、悪さをされないようにするためにも、丁寧な口をきいておく方が間違いないもんだ。

このようにメーシーに語らせることによって、ジョージ・エリオットはサイラスの発作を、彼の薬草の知識とからま

せ、ラヴェローの迷信深い風土の中に巧みに溶け込ませてしまう。弁舌であろうと、手先の器用さであろうと、知識であろうと、およそ人並み外れたものはすべて迷信の対象にされてしまうラヴェローにあって、「青ざめた顔や人並み外れた目つき」をしたよそ者サイラス、しかも手先の器用なはた織りであり、医者が治せない病気を治してしまうほどの薬草の知識を持ち、加えて妙な発作まで起こすサイラスは、迷信の恰好の的となる。要するに、エリオットは、物語の背景となっているラヴェローの迷信深い性質をうまく利用しながら、サイラス・マーナーを神秘のヴェールに包み込んでいる。彼の発作の扱われ方が、そこにとどまっているならば――つまり発作が、サイラスにまつわる迷信を深め、村人との疎外をより一層強くするための一要素として扱われている限り、さしたる不自然さは感じられなかっただろう。ところが、実際には前述のとおり、発作はサイラスの運命を大きく変えていくための手段として使われてしまう。

サイラス・プロットにおいては、作者は合理的、理性的姿勢を取らず、主人公が「神の摂理」を確信するに到る過程を、ミスティシズムの立場から描いていく。したがって、彼が最後に「不思議だ――人生というのは本当に不思議だ」と言う時までには、彼の身に起こった二つの大きな出来事は、単なる偶然ではなく、必然的な運命であったように思えている。こうした展開は、おとぎ話の語り口と相まって、読者に大きな情緒的満足を与える。しかし、そのきっかけとなる発作の扱い方は不自然であり、作為的だという印象を免れない。この点が、サイラス・プロットの唯一の目立った欠点だと言えよう。

サイラス・プロットに対し、ゴッドフリー・プロットはリアリズムの枠の中で語られる。そこで描かれるものは、因果応報という法則が支配する世界である。語り口も雰囲気もがらっと変わる。当然、背景描写も異なり、サイラス・プロットでは、まずラヴェローの迷信深い性質が紹介されたのに対し、ここではその村の伝統的な社会生活が描かれる。ラヴェローは孤立した、ほとんど変化のない村――「産業革命の嵐や宗教熱の風潮から遠く離れ、小高い茂みや轍のついた小道の間に低く隠れている」(三章)村であり、ナポレオン戦争華やかなりし時代でありながら、その平和な暮しは少しも乱されることもない、そればかりか、

地主は戦争を「特別な神の恩寵」と思い込み、終戦のうわさに腹を立てるというエゴイズムにひたっていられる村である。階級意識は強く、金持が「歓楽のうちに日を送る」ことに対して貧乏人はなんの疑問も抵抗も覚えない。それどころか、社交シーズンになり「牛はもも肉のまま、酒は樽のまま出される」大がかりな宴会が続くことを歓迎する——金持の「食べ残し」は貧乏人の「先祖伝来の家宝」であるからだ。

こうした描写には、ほとんど社会批判的な調子は感じられない。たしかに、時おりそれらしいところがあることはある。例えば、村の「おえら方」を代表する地主のキャスは、「いつも眉を寄せ、鋭い目」(九章)をしているが、口元はそれとはちぐはぐにしまりがなく、服装はだらしない。彼が、品の良さにかけては劣らない農民とどことなく違うのは、村には自分より身分の高い人がいないため、「自信を持ち、いばった声で話し、えらそうな態度を取る」ことができるからであり、「目上の人と比較して、考えを改めることがない」結果にすぎない。彼は、上の二人の息子に対する放任ゆえに村人のひんしゅくを買っている。また、朝食の場面では、彼は猟犬のフリートに、「貧しい者にとってはすばらしいごちそうになるほどの牛肉」をさし出す。ドリー・ウィンスロップの息子で庭師のアーロンは、「どんな食べ物も無駄なく人の口に入るようにできたら、誰もひもじい思いをすることはなくなるでしょう」(十六章)と、暗に金持の浪費を非難する。

しかし、全体的には、作者の社会批判はほとんど表立って出てくることはない。それは読者の意識の縁で捉えられる程度のものであり、われわれの関心は、もっぱらゴッドフリーに集中する。ラヴェローの上流階級を代表するキャスの家庭が、「礼儀という美しい花」(九章)を咲かせることもない、無秩序ですさんだ家庭であっても、それは上流階級を批判するためではなく、道徳的堕落の土壌として設定されている。ゴッドフリーは、「妻であり母である人が存在せず、居間や台所に健全な愛情と畏敬を溢れさせる源泉が涸れてしまった」家庭を背景に登場する。そして登場と同時に、やたらと暗さが強調される。十一月のある「消え残る灰色の日光」がぼんやりした光を投げる「暗い腰板張りの居間」に立つゴッドフリーは、「かつては希望に溢れていた」(傍点・筆者)と形容される。彼は弟ダンスタンが現われるや、激しい憎悪の目を向ける。この兄弟の関係

は実に暗澹たるものであり、兄は弟のために、「太陽の光を見ても苛立ちを覚える程」（十二章）の絶望状態に追い込まれている。弟は、兄に対する憎しみ、嫉妬、そして金欲しさから、酒場女のモリー・ファレンとの秘密の結婚という罠を仕掛けた。そして兄ゴッドフリーは、その罠にむざむざとはまってしまった。兄にとってはその秘密の結婚は、ナンシー・ラミターという理想的な女性との結婚を夢見ながら、一時的な劣情に負けてしまった醜い物語でしかない。弟はそれを脅迫の種にし、兄が借地人から預かってきた地代を使い込む。そしてその穴埋めを兄にやらせようとする。一方、モリーは『赤屋敷』に出向いてきて、父親にすべてをばらすと嚇している。今やゴッドフリーが、ナンシーと、そして遺産すらも失う時は目前に迫っている。

しかし、ゴッドフリーは、好運の女神から分不相応な厚遇を受ける——彼の絶望は、弟と秘密の妻の死によって、あっさりと希望に変わる。ここでも二人の人間の死という偶然が、プロットを展開させる原動力となっているわけであるが、前述のとおり、サイラス・プロットと異なり、偶然は神秘的な雰囲気を持たない。作者は、二人の性格、行動の動機の緻密な分析、きっちりと一分の隙もなく組み合わされた細かな出来事を絡ませながら、ダンジィとモリーが死に到る様を論理的に描いていく。したがって、彼らの死は、偶然というより必然的な結果であるような印象を与えている。

いかにも「うすのろ、のろま」（"dunce"）を思わせる名前をもらったダンスタン（Dunstan）の死は、彼の虚栄心、自己顕示欲、そして兄への憎しみが動機となる。ゴッドフリーが地主である父親に渡すべく預ってきた地代を巻き上げ、愛馬を手離さざるを得ない状況に兄を追い込むと、ダンジィはその立派な馬にまたがり、猟場に向かう。柵越えにかけては右に出る馬はないと言われているワイドルファイアなら、乗り手に関係なくどんな柵でも簡単に跳び越し、自分は「猟場の人びとの感嘆の的」（四章）になれると思い込む。ところが「あぶみを直すために馬を降りなければならない」という邪魔が入ったため、先頭集団に遅れをとる。そこでダンジィは「めくら滅法、柵を跳び越そうと」するが、もとより乗馬の下手な彼は、跳びそこねて馬を死なせてしまう。しかし彼には、一見、幸運がつきまとう。高価な馬を柵の杭につき刺し、死なせはしても、「全然売り物にならない」彼の体には、かすり傷ひとつない。

彼はその時「後方で何が起ころうと、おかまいなしに夢中で走っている先頭の連中」と、ずっと後方にいる「落伍者たち」の中間におり、彼は誰にも自分のぶざまな姿を見られていない。「お天気運がいい」と自慢するダンジィは、その上、好天ならぬ霧にも恵まれる。彼は「歩行という前例のない移動方法を取らざるを得ない」状態にいるところを誰にも見られずにラヴェローへ通ずる道にたどり着くと、「いつもの好運が今度も続いたこと」を内心、祝福するが、やがて霧は「やっかいな衝立て」となるほど濃くなっている。こうして作者は彼を待ちうける運命の伏線を張っておく。

ダンジィは、猟場に向かう途中、サイラスの小屋の前を通りかかり、彼がかなりの金をため込んでいるという噂を思い出している。そしてサイラスから金を騙し取れば、馬を売らずに済むと思いつくが、「ゴッドフリーにそんな楽しみを与えたくなかった」気持から、そのまま猟場へ行ったのである。馬を死なせてしまった今、ダンジィはサイラスの小屋を目指すが、濃い霧の中で彼をそこに導くものは、小屋からもれる光である。と言っても、サイラスの奇妙な発作が利用されているのではなく、それは「よろい戸の隙間からもれる光」である。小屋の中では暖炉の火が赤あかと燃えているが、サイラスの姿はない。作者は、ちょうどその時、彼がなぜ小屋にいなかったか、なぜ鍵も掛けずに出かけたかを次の章（五章）で些細に説明する。したがって、ダンジィが来た時、たまたまサイラスが留守であったという偶然の一致は、少しの不自然さもなく、作者の作為を感じさせない。さらに作者は、サイラスが食事の支度までしておきながら小屋にいないことを知ったダンジィに、「ちょっとした用事で外にでて、石切り場の穴に落ちたのではなかろうか」と思わせる。この勝手な憶測は、外は暗さを増したこと、霧は小雨に変わり、道が滑り易くなっていること、盗んだ金貨を身につけ、体が重くなっていること、そして柄にもなく「なんとも言えない恐怖」に捉えられ、気が急いていることと相まって、ダンジィ自身の運命を暗示する。

ジョージ・エリオットは、このダンジィの悪事を実に巧みに扱う。彼には金貨を盗んだ疑いが少しでもかけられてはならないし、また石切り場の跡にできた池に落ちたことも知られてはならない。なぜなら、それは十六年後に衝撃的な形で突然露見し、ゴッドフリーに大きな動揺を与える

必要があるからである。ダンジィの失踪は、彼が村一番の名家の次男坊であるにもかかわらず――と言うより、だからこそ、村にさしたる波紋を投げかけない。村人は彼が兵隊になったとか、「お国の外」へ行ってしまったぐらいにしか思わないし、それに「由緒ある家が絡んでいて話しにくいことでもあるし、誰も立ち入ったことを詮索したいとは思わなかった」（十五章）からである。ましてや、彼の失踪と盗難事件を結びつけることなど、彼らにとっては思いもよらぬことである。こうして作者は、村人の階級意識をプロットの中で巧みに利用する。さらにダンジィの犯罪は、サイラスに村人の同情を集め、彼に対する嫌悪感を弱める結果をもたらす。このことは、エピーを引き取るサイラスに寄せられる村人の善意の準備となっている。つまりダンジィの悪事はゴッドフリーを救うと共に、サイラスが村人と心の触れ合いを持つようになる最初のきっかけを与えることになるのである。

一方、モリー・ファレンは、すでに記したとおり、アヘンを欲み過ぎて死ぬ。このことはまずダンジィによって予言される。彼は兄をからかって、「もしいつかモリーがアヘンチンキを一滴多く飲み過ぎて、兄さんを男やもめにでもするようなことになれば、手間がはぶけるというものでしょう」（三章）と言う。確かに麻薬の中毒患者であれば、この冗談が真実になっても不思議はない。作者はモリーを、ダンジィに劣らず救いようのない性格的欠陥を持った人間として描くが、それは明らかに彼女が麻薬に耽る可能性を示すためである。メロドラマなら、モリーは夫に捨てられたみじめさから麻薬に慰みを見い出すようになったとくるところだが、ジョージ・エリオットは、ただモリーの浅薄で虚栄心に固められた心の内を、ダンジィ同様、主観を交えずに描くだけである。作者はモリーに関しては、くどくどしく書かない――彼女は読者に死ぬところを見せるために登場するだけであるからだ。彼女の役割は、大晦日の晩、サイラスの小屋のそばまでエピーを連れてくることだけである。したがって作者は、モリーがその晩を選んでラヴェローにやってきた動機に説得力を持たせればいいのであり、またそれは成功している。

ゴッドフリー・プロットには、サイラス・プロットにない劇的緊張があるが、それは終始、同一のものによって生み出されているわけではない。そこには明らかな質的変化が認められる。初めはダンジィの動きと、いつ現われるか

分からないモリー・ファレンの無気味な存在、二人に怯えるゴッドフリーの姿が渾然となって緊張を生み出している。しかし、ダンジィが消え、モリーが死ぬと、ドラマの緊張の源は、ゴッドフリーの心理的動きに変わる。ゴッドフリーは、優柔不断、意志薄弱な性格のため、弟と秘密の妻に脅迫されながら、自分からはなにひとつ積極的な行動を起こすことができない。したがって彼の場合、作者はもっぱら彼の心の動きを追っているわけである。性格的な弱さを持つエゴイスティックな人間が、徐徐に堕落の沼にはまっていく様子は、ジョージ・エリオットがもっとも得意とする題材であるので、ダンジィとモリーが生きている間も、彼の心理描写は十分になされている。例えば、彼は弟の脅迫の前に、愛馬を手離すことに同意するが、それは彼が臆病で弟を恐れたからではなく、怠惰で快楽を好む性格であるために、現在の安楽な境遇を捨てたくないからである。秘密をばらされ、勘当されることを考えると、愛馬を失うことなど容易に思えてくる。

しかし、ダンジィが舞台から消えると、ゴッドフリーの心理分析は一段と緻密になり、読者の興味をしっかりと捉えるようになる。馬を死なせたまま弟が行く方知らずになると、彼は父親にすべてを白状しようと思う。どうせダンジィは帰ってきて父親の怒りを一身に受けることを知れば、すべてを暴露し、父親の怒りの鋒先を兄に向けさせるに違いないと思うからである。そこで彼は朝食のテーブルで父親を待ち受ける。しかし、朝食が済んでみると、結局彼はダンジィが使い込んだ地代の言い訳をしただけで、肝心なことはなにひとつ言わなかったことに気づく。この辺は、ヘティの魅力に溺れていく自分を救ってもらおうと、アーウィン牧師を訪れるアーサー・ドニソーンの姿を彷彿させる。アーサーもやはり牧師と朝食をともにしながら話しをするが、告白する気持を持ちながらも、結局目的を果たさずに帰っていく。そして二人とも告白しなかったことに安堵を覚える。アーサーはそれを境にずるずると深みにはまり、ヘティとの関係を深めていくが、同じように告白できなかったゴッドフリーの方は、逆にそのことによって救われる。

ジョージ・エリオットは、モリーと子供の登場と共に、このゴッドフリーの性格を見事に浮き彫りにしていく。彼は、その名前がいかにも God-free を思わせるように、常に運命のさいの目を当てにする。父親に白状しそこねてほ

っとするのも、己の身の破滅は、まだ確定したわけではない以上、ひょっとしていい目が出てすべてうまく収まるかもしれないという気持があるからである。彼は優しい一面を持つが、それも所詮中途半端である。ゴッドフリーにあるものは、生半可な感情と良心だけであり、彼は善人にも悪人にもなり切れない。そして追いつめられると、自分の身の安全だけしか考えない。やさしい面を持つと言われながらも、子供を連れた女が雪の中に倒れていたことをサイラスが知らせに来ると、彼はその女がモリーであることを直感し、彼女が死んでいないかも知れないと心配する。彼の心の中でエゴイズムがもっとも巧みな自己弁護を繰り広げるのは、自分の子供を見捨てる時である。彼はまず、自分は何もしないでいたからこそ幸運を授かったのであり、今後も何もせずにおいた方がいいと考える。ちなみに第Ⅰ部の最後の二章は興味深い終わり方をしている。十四章では、エピーを授かり破滅から救われたサイラスに対しては次のような比喩が使われる。

昔は天使がやってきて、人の手を取り、天上からの火によって破壊された町から遠くへ導いて行った。今では白い翼をつけた天使を見ることはない。しかし今でも人は迫り来る破滅から救い出される。ひとつの手が差し延べられ、その手がやさしく人を静かな明るい土地へ導いて行く。人はもう二度と振り返ったりはしない。そしてその手は幼い子供の手であるかもしれない。(傍点・筆者)

これに対して十五章では、「幼い子供」を見捨てることによって、「前よりも明るく輝やいている」目をしたゴッドフリーの姿が描かれる。彼は多少の良心の苛責を静めようと、「自分の娘の幸せのために何かをしてやれる時がいつか必ずやってくる」と自らに言いきかせる。そして娘がサイラスに育てられていることについては、「身分の卑しい人間は幸せであることが多い、場合によってはぜいたくに育った人間より幸せであったりするから、きっと娘もあの方が幸せだろう」と都合のいいことを考える。このことは、十六年後のエピー自身の判断を考えると、実に皮肉な響きを持つ。このゴッドフリーに対しては、サイラスとはまったく異質の比喩が用いられる。

持ち主が義務を忘れて欲望の命ずるままに行動すると、その指を刺したという有名な指輪の話がある。はたしてその指輪は、持ち主が欲望の追求を始めた時に

強く刺したのだろうか、それとも、その時は軽く刺すだけにしておいて、欲望の追求が終わってしばらく経ち、翼をたたんだ希望がうしろを振り返り、後悔に変わった時に思い切り刺したのであろうか。

第Ⅰ部は、二人の主人公が、まったく逆の要因によって希望に導かれる姿を読者に見せて終わるが、ゴッドフリーの場合には、皮肉がつきまとう。彼がナンシーとの結婚に託す夢と、それに続く彼の内的独白は、皮肉に満ちた対照をなす。

彼は自分が家庭の幸せに包まれている姿を想像し、ナンシーが子供たちと戯れている自分にほほえんでいる様子を心に描いてみるのであった。

それに私は、その家の炉辺にはいないもう一人の子供のことを忘れたりはしない。その子が不自由な思いをしないように気を配ってやるんだ。それが父親の務めというものだ。(傍点・筆者)

作者がゴッドフリーを、本質的には家庭的な人間として描く意図は明らかである——子供を与えないことによって、彼の家庭的な夢を打ち砕くことである。事実、十六年の歳月を経た第Ⅱ部で読者が再び訪れる『赤屋敷』には、清潔さと秩序は見られはしても、依然として活気はなく、暗さが漂っている。その原因は子供がいないことである。ゴッドフリーとナンシーの間にできた子供は、幼くして死亡し、そのあとには子供が生まれない。作者はまず、こういう形で彼を罰する。

しかし、この罰自体はゴッドフリーにはさほど応えるものではない——子供を欲しがる彼の気持には切実さが欠けているからである。彼が子供を欲しがる本質的な動機は、恵まれた生活を送りながら、生きがいを持たない人間の漠然とした不満である。ゴッドフリーにはまず不満な心があり、あとは自分に与えられていない唯一のものである子供にその原因を見い出しているだけのことだ。したがって、エピーを引き取りたいという願望は中途半端であり、サイラスが激しく抵抗し、エピー自身も拒絶反応を示すと、彼はあっさり引きさがってしまう。この作品においてもっとも大きな盛り上がりを持つこの場面(十九章)では、作者はゴッドフリーに対しては強い反感を、サイラスとエピーに対しては強い共感を読者に起こさせるように描いていく。ゴッドフリーは、思い上がりと自己中心的発想から、エピーを引き取ることは簡単に実現すると思い込む。作者は彼

が子供を欲しがる理由のひとつに、エピーに対する罪の意識から、子供のいない自分の家庭が天罰の様相を呈しているように思えていることを指摘する（十七章）。しかし、サイラスとエピーを前にしたゴッドフリーには、自分の過を悔いる謙虚な気持は微塵も感じられない。所詮、ゴッドフリーのような人間には自責の念が強く起きてくることはあり得ないのであり、彼の言葉は読者の鼻をつくエゴイズムの悪臭を放っている――彼のエゴイズムは、この場面へと収斂され、エピーの嫌悪感を生み出すのである。作者はさらにゴッドフリーの階級意識をエゴイズムの中に織り込んでくる。彼はサイラスとエピーの関係を、まったく無神経になんの思いやりもなく推測する。彼には、「サイラスがエピーを手離すくらいなら死んだ方がましだと思っているほど可愛いがっている」（十七章）ことは思いつかない――なぜなら「額に汗して働く者を見て抱きがちな印象から、ごわごわの手をした貧しい者が深い愛情を持つことなどほとんどあり得ない」（十七章）と考えているからだ。しかし、実際には、エピーが握りしめたサイラスの手は、「このような感触に敏感な手の平と指を持った」（十九章）手なのだ。作者は、彼がそう考えるのも、ただ彼が実情を知らないだけのことであり、ゴッドフリーのやさしい性質に変わりはないと弁護する。しかし、二人に対する思いやりの欠如と、目下の人間には繊細な感情の存在を認めない傲慢さは、作者の弁護をまったく無力なものにしてしまう。

同じような現象が、妻のナンシーにも見られる。彼女には、ゴッドフリーとは異質の要因が認められる――つまり掟である。ナンシーには若い頃から独自の掟があり、彼女はそれを厳しく守りながらすべての習慣を作り上げ、自らを律してきた。だからこそ、最初の子供が幼くして死ぬという試練に遇った時、意志の弱い夫とは異なり、「毅然として愚痴ひとつこぼさず」（十七章）耐えしのんだ。しかし、同時にそれは、ドドソンの女達と同様、ナンシーも自分の掟の外には一歩も出られないことを意味する。彼女が、エピーを養女にもらいたいと言った夫に反対したのが掟ゆえならば、エピーが夫の実の娘であることを知るや、彼女を引き取ることに同意するのも掟ゆえである。ゴッドフリーとサイラスの対決場面においても、彼女の心の中では掟が優先する――彼女はサイラスとエピーの感情より、実の親に対する子供の義務を重んずる。しかも、夫と同様、彼女にも階級意識が潜んでいる。「感受性豊かな、人

を愛する心」（十九章）を持ちながら、彼女は恵まれた境遇の中で育てられてきた「良家の子女」の域を出ることができないため、「貧しい家に生まれ育ち、貧しい家の習慣を身につけてきた人たちが、どのような喜びを感じながらささやかな目標をたて、それに向かって努力するかを思いやる」ことができない。ナンシーもまた、サイラスとエピーの間に通う深い愛情の存在に気づかないのだ。そしてエピーを引き取ることが不可能だと分かった時に彼女が何よりも気にかけることは、「世間体」である――エピーが実の娘であることを秘密にしておくという夫の決意が彼女に与える安堵感は、ほかのどの感情よりも強い。

しかし、サイラスとエピーに対する共感に欠けてはいても、彼女は夫に対する思いやりに欠けることはない。彼女は清楚にして完璧な外見的美しさを強調されるとともに、「花びらの上におりた露のように澄み切った誠意」（十七章）を持つことも指摘されるが、それは夫との関係――夫への愛情――に顕著に表われる。彼女自身は、子供が授らないことを「神のみ心」ときっぱりあきらめるが、いつまでもあきらめ切れずにいる夫の心の内を思いやることもできる。そして夫が、自分との結婚を後悔することがないように、ひたすら努力する。こういうナンシーの姿には、常に哀愁が漂う――ゴッドフリーは彼女の愛に価しないからだ。彼女につきまとう物悲しい雰囲気は、彼女の病的な内省癖――ナンシーには誰よりも中間話法が多用されている――によって強められる。常にさまざまな思いが彼女の胸の内をめまぐるしく去来し、そして堂々めぐりする。それを言うのも、姉のプリシラが彼女を評して「いつまでも腐った卵を抱いている」（十一章）と言うように、ナンシーは、今さらどうにもならない自分の過去の行為が、はたして正しかったかどうかを考えることが多いからである。この度を越した内省と自己反省は、感じやすく内向的で忘却を知らない性格と、裕福な生活の中で暇を持てあましている、しかも狭い世界に閉じこもっていることがもたらす結果と言える。

彼女は十五年間にわたる結婚生活を、何度もつぶさに心の中に再現してみるが、そういう時、彼女をもっともみじめにさせるものは、いつまでも子供に執着している夫の気持である。彼女は、言わば、夫に下された罰のとばっちりを受けているわけである。したがって、ゴッドフリーがその執着を捨てさえすれば、彼女は幸福になれるのであり、

また事実そうなる。作者が指摘したゴッドフリーのやさしさは、もっぱら妻ナンシーに対して発揮されるのであり、彼女が彼のことを姉に、「夫としては最高の人」（十一章）と言うのも、けっして謂ないことではない。石切り場の水がなくなり、弟ダンジィの白骨死体が、盗まれたサイラスの金貨とともに発見されると、ゴッドフリーは、「帽子を置く手はぶるぶると震え、顔は青ざめ、目は妻を見てもなんの反応も示さない」（十八章）ほどのショックを受ける。しかし、彼が妻に、長年隠し続けてきた秘密を打ち明ける動機となるのは、ネメシスに対する恐怖ではない。どんな秘密もいずれはばれてしまうことを悟ったゴッドフリーは、自分の秘密を他人の口から聞かされたら、妻はどれほど傷つけられるであろうと気遣うからこそ、妻の軽蔑、嫌悪感を覚悟の上で告白する。実際には彼の予想はまったく外れ、自分は十五年も連れ添った妻を理解していなかったことを悟る。そして彼はこのことに、「いやというほどにがい思い」（十八章）を嚙締める――彼が秘密を守り続けたことは、単に無意味であったばかりでなく、その目的の達成すらも不可能にしてしまう過であったからだ。

こうしてゴッドフリーは、二重、三重に罰を受ける。しかし、作者が「ネメシスは大変穏やかです」と言っているとおり、その罰はけっして厳しいものではない。ゴッドフリーは、自分の娘に背を向けられ、娘の結婚式の当日にはラヴェローにいたたまれず隣りの町へ行ってしまう。また、「私は昔、自分に子供はいないと人に思われたかったんだよ、ナンシー――それが今では不本意ながら、そう思われるんだ」（二十章）という彼の言葉は読者の心に長い余韻を残す。しかしその罰は、新たな幸福への出発を意味している――子供をあきらめたゴッドフリーは、ナンシーという、自分には過ぎた妻がいることを認識するからである。次のように妻に語るゴッドフリーには、明確な道徳的進歩が見られる。

「いろいろなことがあったけど、でも私にはお前がいてくれる。それなのに私は、まだ何か足りないといって、これまで愚痴をこぼしたり、落ち着かない気持でいた――いろんなものを得る資格はないのに」（二十章）

かくしてゴッドフリー・プロットは、夫婦の絆を強めたゴッドフリーとナンシーが、以後二人だけの幸福の中で暮らす姿をはっきりと読者の心に思い浮かばせながら、幕を閉

じていく。サイラス・プロットが、澄み切った青空の明るさの中で終るなら、こちらは薄い雲の陰りを感じさせながら終る。

「サイラス・マーナー」は、ほとんど欠点を持たない作品と言える。二つのプロットは、語り口の明確な対比を見せながら、両者の調和が失われることのないように、注意深く展開されていく。二人の主人公の運命は、エピーの登場を境に、はっきりと明暗を分ける。サイラスはエピーが現われるまでの十五年間、不幸を感ずることもできないほど感覚が麻痺したまま、ラヴェローという社会の中で孤立した生活を送る。彼は、ほぼ同じ年数をエピーと共に幸福に過ごすが、ゴッドフリーはその間、生きがいを与えられぬまま、不満の中で暮す――サイラスは「神様のお恵み」(十九章)を迎え入れて幸せになるが、それを「自分から追い出した」ゴッドフリーは幸福になれない。石切り場の水がなくなることによってサイラスは金貨を取り戻し、「神の摂理」に対する確信を強める。同じ出来事はゴッドフリーにネメシスの恐ろしさを悟らせる。そしてエピーの選択はサイラスの幸福をより確固たるものにすると同時に、ゴッドフリーとナンシーの夫婦愛を深める要因となる。

一方、作者は二つのプロットに直接関係しない部分も、作品のテーマに密着させる。物語が小休止する六章のレインボー亭の場面は、ただユーモアと村人の気質を描くだけではない。メーシーが語る昔話のひとつに、ナンシーの祖父が現われる――「北の方」からやってきたよそ者ではあったが、ラヴェローに同化し、土地の人々の尊敬を得た。こうして作者は、さり気なくサイラスのアンチテーゼとなる人物を登場させる。メーシーはさらにナンシーの父親の結婚式で起きた、ある奇妙な出来事を村人に話して聞かせる。年寄りのドラムロー牧師は、式の最中、新郎新婦に向かって、「汝はこの男を汝の妻とするや」「汝はこの女を汝の夫とするや」と言ってしまう。そのことに気づいたのは、メーシーひとりであった。彼は「もし言葉があべこべだったために、二人がしっかり結びつかなかったらどうしよう」と心配する。ところが牧師の方はその心配を一笑に付し、二人を結びつけるものは言葉でなく「結婚届け」だと事もなげに答える。言葉の神秘的な力を信ずるメーシーと、論理的な考え方を見せるドラムロー牧師の対比は、そのまま、サイラス・プロットとゴッドフリー・プロットの

対比でもある。メーシーの話はさらに続き、「クリフの休日」と呼ばれる怪談話へと進む。この「金ほしさに人を騙したもんで気が狂っちまった」クリフの話は、ゴッドフリー・プロットと同様、応報天罰を説くものであるが、同時に、「仕立屋」と呼ばれることに屈辱を覚え、息子に乗馬を習わせて「仕立屋根性」を追い出そうとしたクリフは、淑女になるより自分の現在の境遇にとどまることを選ぶエピーと顕著な対照をなす。サイラスの金貨盗難事件が引き起こす村人の論議、クリフにまつわる怪談が火をつける幽霊談義は、神秘派と理性派に分かれるが、作者はそのどちらにもコミットしない。「物事には二つの見方がある」と言い、どちらも正しいと主張するレインボー亭の亭主スネルは、作者の立場を代弁する人物と言える――ジョージ・エリオットは、人生を支配する二種類の法則、人生に対する二つの見方を、対立し相入れぬものとして描くのではなく、客観的な目を保ちながら両者を並列し、調和させているのである。作品のあらゆる部分に見られる客観性、題材に対する共感とディタッチメントのほど良いバランス、神秘と論理の対比と調和、二つのプロットの巧みな交錯・絡み合い、ユーモアと活気にあふれた村人の描写――「サイラス・マーナー」は、短い作品ながら、数多くのすぐれた要素を備えた作品である。そして、ジョージ・エリオットはこの作品を境に、新たな創作の分野へと入っていく。「サイラス・マーナー」は、彼女の幼い頃の記憶に残る世界を題材にした最後の作品でもある。

〔注〕

(1) *Letters* Ⅲ巻二九五頁

(2) 同　三六〇頁

(3) 同　三八二頁

(4) エピーという名は、ヘフジバ（Hephzibah）の愛称である。ヘフジバはヘブライ語で、「わが喜びは彼女にある」という意味を持つ。サイラスが言う通り、聖書（旧約）に出てくる名前であり、イザヤ書第六二章四節には次のようにある。

あなたはもはや「捨てられた者」と言われず、
あなたの地はもはや「荒れた者」と言われず、
あなたは「わが喜びは彼女にある」ととなえられ、
あなたの地は「配偶ある者」ととなえられる。

ヘフジバは、サイラスの母の名であり、母が自分にちなんで娘につけた名であるが、サイラスは自分でも気づかず

に、子供が自分に対して持つ意味を、適切に名前によって表わしている。

(5) 成長したエピーは、あまりにもきれいに扱われすぎている。作者は、サイラスに守られ、エピーがまったく何ものにも毒されずに育ったことや、「完全なる愛情」に息づいている「詩情」が、ずっとエピーを包んできたため、「上品な美しさばかりか、ほかの点においても、そこらの村の娘とは違っていたのは当然」(十六章)であると言う。さらにエピーは、「子供っぽく単純であった」ため、母親が残していった結婚指輪を見せられても、「その指輪が象徴する自分の父親のことをほとんど考えなかった」(同)と描かれる。そしてゴッドフリーが私がお前の実の父だ、と名乗り出て彼女を引き取りにきた時、エピーの心にはさしたる葛藤もなく、実の父の申し出に対する答は、「サイラスのひと言ひと言に共鳴して震えた自分の感情によってはっきり決まっていた」(十九章)し、ゴッドフリーには「強い嫌悪感」を覚える。エピーが理想化されていることは明らかだが、サイラス・プロットの雰囲気から、読者はそれほど不自然とは感じない。

(6) *Silas Marner: The Weaver of Raveloe* (Rinehart and Winston, New York, 1962), Introduction, xx—xxi.

(7) *George Eliot: Her Mind & Her Art* (Cambridge, 1962) pp. 132-133.

(8) Catalepsy (強硬症)「ほとんど自主的運動がなく、全身筋肉は恰もろう細工様の強直を示し、他動的に置かれた不自然な姿勢をいつまでも保つ。ヒステリー又は精神分裂病の緊張病の時に現われる」(新英和医学辞典〔医学出版、一九五七年〕より)